

# 人工藻によるアメリカザリガニ幼体の捕獲法

NPO 法人シナイモツゴ郷の会

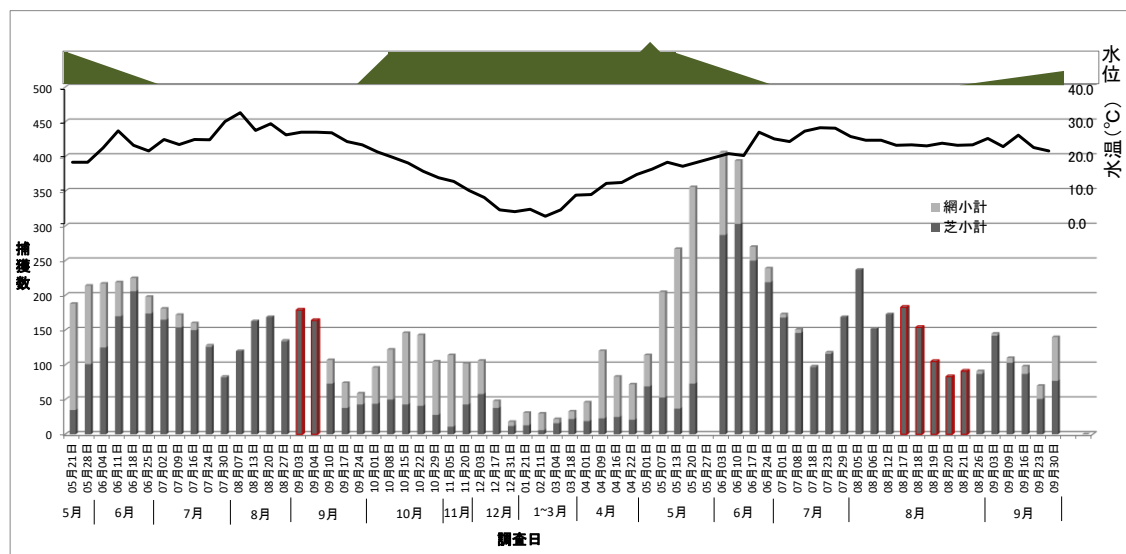
長谷川 政智

現在、アメリカザリガニの駆除が各地で行われているが、高密度生息池において捕獲による低密度化や完全駆除に成功した事例は少ない。駆除にはアナゴカゴ、カニ籠、網もんどりを使ってトラップの中に餌を入れて捕獲する方法が一般に行われている。これまでのトラップを使った餌の誘引による捕獲では、開始当初は大型個体が優先して捕獲され、駆除圧力を高め大型個体を減少させた後で小型個体が捕獲された。捕獲されなかった小型個体は数か月後に成体となって再生産に加わるので効果的に生息個体数を減少させるためには小型個体の捕獲が不可欠と考えられる。

ブルーギルやミシシippアカミミガメなどの駆除生物と同様に習性を利用して捕獲する事や、生活史のさまざまな段階で捕獲・駆除を効率よく行うことが必要となる。伊豆沼で行われているブラックバスの駆除では、障害物のある浅場で産卵する習性を利用し、人工産卵床を使って卵の段階で駆除し、卵から孵化したばかりの稚魚の群れや浮上した稚魚の群れを幼魚の段階でさで網をつかってすくい採る。成長した大きな個体は定置網や電気ショッカーを使って駆除する。伊豆沼では、生活史のさまざまな段階の個体を駆除することでブラックバスを減少させている。アメリカザリガニの駆除においても、卵の段階、稚ザリガニの段階、小型個体（幼体）、大型幼体・成体個体と生活史のそれぞれの段階で駆除を行うことが必要と考えられる。大型の幼体や成体は餌の誘引による捕獲方法により駆除できる。では、小型個体をどのように捕獲するのか？

昨年実施したしばづけによる捕獲実験では、小型個体を捕獲することができた。2016年5月から11月までの捕獲調査では小型個体の割合がしばづけとさで網によるすくい採りで8割以上となり、連続捕獲装置では2割以下であったことから、しばづけとすくい採りが小型個体の捕獲に有効であることが分かった。

しばづけとさで網によるすくい採りの両方法で小型個体を捕獲できたが時期によって捕獲数や体長に違いが見られた。駆除を行っているため池の水は農業用水として使用され、秋から春にかけ貯水により水位が高く保たれ、春から農業用水として使用されるため減水が始まり、夏には2m以上水位が低下する事もある。水位の高い時期は水没した雑草が天然の隠れ場となり、すくい採りの方がしばづけよりも捕獲個体数が多かった。減水時期は、天然の隠れ場が無くなり人工の隠れ場となるしばづけでのみ捕獲された。活性が高い夏の日中では、水底にいるアメリカザリガニは近づくとき速やかに逃亡するが、しばづけの表面に生息する個体はしばづけの中に隠れるため効率よく捕獲できた。



調査したため池では、冬季に水温が約5℃以下となると捕獲数が低下し、春季に水温が約8℃以上に上昇すると捕獲数が増え始め、12℃を超えると大きく増加した。このため、しばづけやすい採りでは、水温が春の12℃以上から冬の5℃までが個体を多く捕獲できる水温域と考えられる。冬場に水温が5℃を下回らない地域では検討が必要である。

頭胸甲長は春から秋にかけ大きくなり、特に秋の一時期には大型個体が半数以上を占めるようになる。その後は、大型個体が減少し、稚ザリガニの加入によって小型個体の割合が上昇した。調査では、稚ザリガニが4月及び7月から11月にかけて確認され、そのピークは4月と10月であったことから産卵の多くは9月以降である可能性が示唆された。しばづけとすくい採りは産卵時期のモニタリングとしても利用することができた。

これまで、しばづけは杉の枝葉を使用してきたが、今回、他の素材を使った捕獲を試みた。調査期間に長短があることや、杉と比べ、捕獲数が多い時期や少ない時期があり、杉より劣っているとは判断し難い。特に養殖ノリ網を使ったしばづけは設置場所や時期によっては杉のしばづけより多く捕獲できた日もあることや、劣化がしにくく長期間使用できることや杉の枝葉が手に入らない場所で使用することができるなど、工夫によっては人工藻として使用できるのではなかろうか。

調査池では現在、生活史のさまざまな段階における駆除として巣穴掘りによる雌雄ペア個体の捕獲、抱卵雌個体の捕獲、侵入阻止のため定置網による移動個体と抱稚ザリ個体の捕獲、しばづけやすい採りによる小型個体の捕獲、連続捕獲装置による大型の幼体や成体の捕獲を行っている。調査池の上段ため池では、昨年、多数の巣穴を確認したが、今年はこれまでに5個の巣穴が確認できただけである。駆除・捕獲残しを少なくすることや侵入阻止によって繁殖し増加する個体も少なくなるだろう。

